

論 文

## 施設入所高齢者の衣服についての実態調査

### A Study of Actual Conditions on Clothing of People Living in a Home for the Elderly

高山真佐子・小山 京子

#### 緒言

わが国の人口の高齢化は急速に進み、65歳以上の人口が総人口に占める割合は、2025年には27.4%になると予測されている。

また、1998年簡易生命表によると、日本人の平均寿命は、女性が84.01歳、男性は77.16歳で依然として世界一の長寿国となっている。

人間が、かつて経験したことのない高齢社会の中で、高齢者が自立して心身共に豊かに生活するためには、生活の質を多面的に捉え、改善していくべき多くの問題があると考えられる。

現在、わが国の社会福祉事業をとり巻く世界は大変革期を迎えている。高齢化の進展に伴う要介護者の増大や、介護リスクの一般化等から、国民の最大の不安要因となっている介護問題に対応していくため、2000年4月から公的介護保険制度の導入が予定され、介護の質の向上、ひいては、生活の質の向上が期待されている。

衣生活分野では、生きがい充足のために至近な衣が注目され、衣生活行動そのもので自己実現しようとする志向へ変わりつつあるが、高齢者と衣に関しては、デザイン、サイズ、色・柄、素材の面で選択の幅が限られ、着装行動と衣服構成や身体的機能等の問題点も多くみられる。

ライフステージと衣服の関係では、着衣基体の形態や、着脱し、装って生活する人の身体機能が加齢と共に変化し、さらに、装う人の多様な価値観により、衣

服に対する満足感も多岐に変化している。

高齢者の衣服は、高齢期の衰退をカバーして、情動の活性化、生きがいの付与、衰退へのケアができることが必要と考えられる。着装行動は、日常生活を送る上で最も基本的な行動であり、田中ら<sup>1)</sup>によると、高齢者の着装行動は、自己意識の低下を防ぐ、あるいは、自己意識を強化する可能性をもつことを示唆するものであるとしている。

そこで、個人的な嗜好を満足させ、身体にあった衣服を自己の力で着脱でき、快適な衣生活を送ることは、高齢者の生活を活性化するものであると考え、高齢者の衣生活について、衣服構成や着装行動の問題点を見出して改善し、衣服により生活の快適性や、自立性を高めていくことを目的として実態調査を行った。

本研究では、高齢者の実態をできるだけ多く、正確に把握したいと考え、非健常者の多い高齢者対象の調査は困難性を伴うことを考慮して、高齢者入所施設の介護の責任者を対象に、施設で生活している高齢者の状態を岡山県内全域で調査し、施設の介護者側から見た高齢者の実体や、衣服に対する意識、問題となる事項を明らかにして、衣服による自立の方向性、取り組むべき課題について検討した。

#### 調査方法と調査対象高齢者入所施設の概要

##### 1. 調査方法

岡山県下の高齢者(老人)入所施設225施設に対して、郵送法によるアンケート調査(無記名の質問紙法)を実施した。各施設に、1通ずつの調査票を郵送

表1. 調査対象施設の概要

施設	項目	施設数		
		県南	県北	計
特別養護老人ホーム		71	22	93
養護老人ホーム		16	7	23
軽費老人ホーム(ケアハウス)		38	6	44
有料老人ホーム		2	1	3
老人保健施設		48	14	62
合計		175	50	225

し、高齢者の衣生活に関する事項について、介護に当たる責任ある立場の人1名に回答してもらう方法をとった。

調査期間は、1999年7月から1999年9月、配布票は225(岡山県下全域)、有効回収票180、有効回収率80.0%である。

調査結果は、基本属性を主な分析軸として、クロス集計、因子分析を行い、その傾向を検討した。

## 2. 調査対象と施設の概略

老人福祉法20条および29条に定められた4施設と、老人保健法6条に定められた1施設、合計5種類の施設について、岡山県内全域を対象とした。その概略を表1に示す。

調査対象5施設の特徴は次のようである。

### (1) 特別養護老人ホーム(福祉系施設)

65歳以上の者であって、身体上又は精神上、著しい障害があるため、常時介護を必要とし、かつ、居宅においてこれを受けることが困難な者を入所させて養護する施設。

### (2) 養護老人ホーム(福祉系施設)

65歳以上の者であって、身体上若しくは精神上又は環境上の理由及び経済的理由により、居宅において養護を受けることが困難な者を入所させて養護する施設。

### (3) 軽費老人ホーム(ケアハウス)(福祉系施設)

無料又は低額で老人を入所させて、給食その他日常生活に必要な便宜を供与する施設。

### (4) 有料老人ホーム(福祉系施設)

常時、10人以上の老人を入所させて、給食その他日常生活に必要な便宜を供与する施設であって、老人福祉施設でないもの。

### (5) 老人保健施設(医療系中間施設)

病気、負傷等により寝たきり状態にある老人等に対し、看護、医学的管理の下における看護及び機能訓練、その他必要な医療を行うと共に、その日常の世話を行う施設。

## 3. 調査内容

### (1) 調査対象施設

- 1) 施設の種類・所在地
  - 2) 調査票記入者の性別・年齢
- ### (2) 高齢者対象の行事
- ### (3) 高齢者の衣生活の状態
- 1) 衣服の入手
  - 2) 衣服への関心
  - 3) 衣服の着脱
  - 4) 衣服の着替
  - 5) 日常着・寝衣に対する不満

### (4) 介護者の意識

- 1) 高齢者用衣服に対する要求
- 2) 日常着・寝衣のデザイン
  - ① 衿
  - ② 上衣の明き
  - ③ 袖
  - ④ 下衣(ズボン)
  - ⑤ 止め具
- 3) 衣服の色
- 4) 施設内での生活の問題点

### (5) 高齢者衣服に対する要望

## 4. 岡山県の高齢化の概況

調査対象地である岡山県の高齢化率は、1998年10月1日現在で19.2%である。津山地方振興局管内では22.8%であり、特に県北の過疎地域の町村は高齢化の進行が著しく、高齢化率35%を超えているところがあ

る。

## 結果および考察

### 1. 調査施設および調査票記入者の状況

高齢者入所施設の調査結果について基本属性別に分析し、基本属性の施設の種類の、調査票記入者の性別、年齢を主な分析軸として高齢者の多様な生活状況と衣服について検討した。

施設については、5施設の性格と入所者の身体的、精神的自立の度合いから3グループ(A, B, C)に分類した。Aは特別養護老人ホーム(73施設)、Bは養護老人ホーム、軽費老人ホーム、有料老人ホーム(56施設)、Cは老人保健施設(51施設)とした。以下、この3グループの施設での分析を行った。回収結果を表2(2-1, 2-2, 2-3)に示す。

施設別回収状況は、対象の少ない有料老人ホームを除いて、養護老人ホームから最も多い95.7%の回答があり、地域別では、県南、県北共に約80%の回答があった。県南、県北の回答比は、約8:2である。回答者(介護責任者)は、女性が87.2%と多く、年齢は40歳代が33.4%、ついで50歳代が28.5%、20歳代が

19.6%となっている。

調査記入者の男性は、3グループ共に11.0%~15.7%で少数であるが、近年介護現場に男性が増加してきているので、増加傾向にあると考えられる。年齢別にみると、Cグループでは40歳代が47.1%と約半数を占めており、介護の中心となっていることがうかがわれる。A, Bグループでは、50歳代がそれぞれ約34%を占めており、ついで40歳代となっている。3グループ共に30歳代より20歳代の方が回答者が多い。

地域別では、3グループ共に県南が約80%と高いが、グループ別、地域別の回答率は、Cグループの県北が調査票14部配布中13部回収で92.9%と高くなっている。

### 2. 入所者対象の行事

高齢者に生きがいを与え、情動を活性化するために施設が行っている行事について、1998年4月から1999年7月までの実施率を、施設A, B, Cグループ別に図1に示した。行事内容については、施設での実施状況の多いものと、小林ら<sup>2)</sup>の調査を参照して設定した。

施設全体では季節行事が97.2%と非常に高く、次いで外出が87.2%、趣味活動が86.1%、演劇会・演奏会が85.6%と高い実施率となっている。ファッションショーは3.3%、過去に実施したものを入れても5.0%

表2. 調査票回収結果

#### 2-1. 施設別回収状況

	回収数	施設別回収率
特別養護老人ホーム	73	78.5(%)
養護老人ホーム	22	95.7
軽費老人ホーム(ケアハウス)	31	70.5
有料老人ホーム	3	100.0
老人保健施設	51	82.3
合計	180	

#### 2-2. 地域、性、年齢別回収状況 (人、%)

地域	県南	県北	性別	男性	女性	年齢	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	その他
							35	25	60	51	7	1
	139人	41	別	23	157	齢	19.6	14.0	33.4	28.5	3.9	0.6
	77.2%	22.8		12.8	87.2							

#### 2-3. 調査票記入者の状況(施設、地域、性、年齢別) 人(%)

施設属性	A 特別養護老人ホーム		B 養護老人ホーム 軽費老人ホーム 有料老人ホーム	C 老人保健施設
	地域	県南 17(23.3)	県北 56(76.7)	45(80.4) 11(19.6)
性別	男性 8(11.0)	女性 65(89.0)	7(12.5) 49(87.5)	8(15.7) 43(84.3)
年齢別	20歳代 14(19.2)	30歳代 12(16.4)	11(20.0) 5(9.1)	10(19.6) 8(15.7)
	40歳代 22(30.1)	50歳代 25(34.3)	14(25.5) 19(34.5)	24(47.1) 7(13.7)
	60歳代 0	その他 0	5(9.1) 1(1.8)	2(3.9) 0

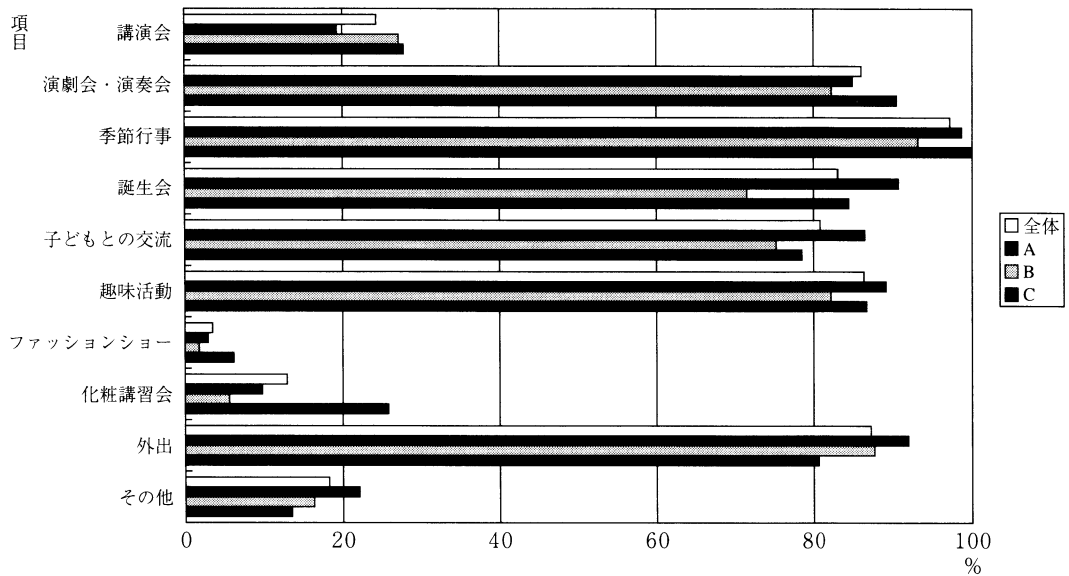


図1 高齢者対象の行事の実施率

であり、化粧講習会は12.8%、過去に実施したものを  
入れて18.3%と低いものになっている。

グループ別では、A・Cグループが演劇会、季節行  
事、誕生日会、子供との交流、趣味活動、外出の実施率  
が約80%以上で非常に高く、Bグループは講演会と外  
出を除いた項目全てがA・Cグループより低い。

特別養護老人ホームや老人保健施設は非健常者が多  
く、心身の活性化に力を入れていると考えられる。  
A・Bグループについて、小林らの調査と比較する  
と、類似した傾向を示しているのはファッション  
ショー、季節行事、誕生日会、子供との交流、外出であ  
る。小林らより低いものは、講演会、化粧講習会、趣  
味活動であり、高いものは、演劇会や演奏会であっ  
た。

衣は、食や住と共に生活に不可欠な要素であり、高  
齢者が衣に積極的にかかわり、おしゃれ意識を持ち、  
快適に過ごすことは生活を活性化するものであるとの  
考えから、近年、高齢者用衣服のファッションショー  
が開催されている。これは、装うことが精神面の活性  
化や、自己意識が強化される可能性を示唆するもので  
あり、今後、施設等の行事の中に増加させていく必要  
があると考えられる。

化粧は顔の装いであり、衣服の装いと同じレベルで  
考えられ、化粧行動が、高齢女性の情動活性化や残存  
機能の回復に役立つものとして、活用され出してい  
る。本調査でも老人保健施設では25.5%の実施率と  
なっている。余語<sup>3)</sup>は、化粧行動によってもたらされ  
る心理的効用を「化粧行為自体が持つ満足感」、「対人  
的効用」、「心の健康」という3つの主要な側面に分け  
ており、化粧を用いて顔を装うことが、行為者の内的  
な感情状態や対人の積極性に及ぼす効用に注目した研  
究をあげている。

最近では、老人福祉の領域において、情動活性化の  
目的で、化粧を施設でのレクリエーション活動に採用し  
ているとの実践報告も多く、その効果に期待が寄せら  
れている。本調査においても、老人保健施設では約25%  
が実施しており、県南の同施設では、化粧セラピーを  
積極的に取り入れようとしているとの回答も得てい  
る。

伊波ら<sup>4)</sup>は、情動活性化療法において、刺激に化粧  
を用いる利点として次の事柄をあげている。1) 参加  
対象となる女性の多くにとっては、化粧プログラム導  
入は心理的な違和感や、抵抗感が少ない。2) 参加者  
の視覚、触覚、嗅覚など五感に訴える情動価値が高く、

基本的には快刺激であると考えられる。3) 道具の入手および実施が比較的簡便であり、参加者、実施者双方への作業負担も軽い。4) 実施した際、参加者本人にも周囲の者にも実施前後や過程における変化が視覚的に明らかなので、フィードバックを得やすい。5) 化粧プログラム終了後、参加者にとって、自発的にかつ習慣的に取り入れやすい。

しかし、療法的に適用する際の化粧の効果を実証的に測定し、さらに効果を得るための介入手法を検討する必要があるとしているが、今後、施設の実情や入所者の要求に即した化粧による情動活性化プログラムを実施することは有効性があり、有意義であると考えられる。

### 3. 高齢者の衣生活の状態

(1) 衣服の入手 衣服の入手方法を表3-1に示す。全体では「家族・親族が準備する」が42.3%と最も高く、次いで「自分で選ぶ」が27.4%、「施設の世話で購入する」が26.1%となっている。施設別にみる

表3. 高齢者の衣生活の状態

項目	施設	全体	A	B	C
自分で選ぶ		27.4	12.6	48.6	24.1
殆ど自分で作る		0.6	0	1.9	0
家族・親族が準備する		42.3	41.5	29.9	58.7
施設の世話で購入する		26.1	42.3	17.8	11.5
施設から借りる		2.1	2.2	0	4.6
知人、その他からもらう		0.6	0.7	0.9	0
その他		0.9	0.7	0.9	1.1

### 3-2. 衣服への関心 (%)

項目	施設	全体	A	B	C
入所者総数の約8割がある		19.2	1.4	55.4	4.1
入所者総数の約6割がある		15.8	11.1	19.6	18.4
入所者総数の約4割がある		19.8	25.0	12.5	20.4
入所者総数の約2割がある		24.3	34.7	5.4	30.6
入所者総数の約1割以内		20.3	26.4	7.1	26.5
全くくない		0	0	0	0
その他		0.6	1.4	0	0

と、Aグループでは「施設の世話で購入する」が42.3%と最も高く、「家族・親族が準備する」が41.5%となり、施設での選択が大きくなっている。Bグループでは健常者が比較的多いため、「自分で選ぶ」は48.6%となっている。Cグループでは「家族・親族が準備する」が58.7%と高く、ついで「自分で選ぶ」が24.1%となっている。A・CグループとBグループは異なった傾向を示しているが、衣服の入手に、家族・親族の意向が反映しているものと思われる。

高齢期の精神的充足感形成には、家族による対応のあり方が重要な役割を持っており、家族の快適な衣服提供は、情緒的支援につながる。同時に「自分で選ぶ」機会を様々なレベルの人に多く提供することも、高齢者の活性化の一方法であると考えられる。

(2) 衣服への関心 衣服への関心の度合いを表3-2に示す。全体では、「入所者総人数の内約2割」が関心を持っているところが24.3%と多く、ついで「1割以内」が20.3%、「約4割」が19.8%、「約8割」が19.2%で、関心の度合いは全体的に低い。施設別にみると、Aグループでは「約2割」が34.7%と最も高く、Bグループでは「約8割」が55.4%と半数以上となり、Cグループでは「約2割」が30.6%で最も高い。衣服の入手と同様な傾向を示しているといえるが、A・Cグループは身体的、精神的状況を考慮しながら、日々の服装に周囲の者が関心を示して反応し、交流をはかり、様々な行事の中に「衣服を見る」機会を作っていくことも重要と考える。

(3) 衣服の着脱 衣服の着脱可能な度合いを表3-3に示す。全体では、「少しは自分で出来るがほとん

### 3-3. 衣服の着脱 (%)

項目	施設	全体	A	B	C
全て自分で出来る		21.2	0	66.0	2.0
大体自分で出来るが介助がいる		13.4	0	30.4	14.0
少しは自分で出来るが殆ど介助がいる		57.6	80.8	3.6	84.0
全て介助がいる		7.8	19.2	0	0

ど介助がいる」が57.6%と半数以上である。施設別にみると、AグループとCグループでは「少しは自分で出来るがほとんど介助がいる」がそれぞれ80.8%、84.0%と最も高く、Bグループでは「全て自分で出来る」が66.0%と最も高く、自立の度合いの違いを示している。

被服行動の基本である着脱は、高齢者の自立に大きく影響し、高齢者が衣服に求める第一要件は着脱のしやすさといえる。着脱が「自分で出来る」ためには、身体的、精神的機能が良好であり、着脱容易なデザインであり、介助者の時間的見守り努力も必要となるが、また、着脱そのものが機能回復訓練にもなる場合も多く、高齢者の活性化のための大きな要素として位置づけたい。

(4) 衣服の着替 日常着と寝衣の着替え状況を表3-4に示す。全体では、「毎日着替えている」が53.2%、「全く着替えない」は10.7%である。施設別にみると、Aグループでは「時々着替えている」が41.7%と最も高く、B・Cグループでは「毎日着替えている」がそれぞれ90.7%と64.6%と最も高くなっている。Cグループは、着脱には介助がいるが、6割以上の人が毎日着替えており、施設が着替えの効用と高齢者の自立を重視しているものと思われる。

「毎日着替えている」人の内、衣服を「自分で選ぶ」人が36.1%であり、「約8割が衣服に関心を持っている」人は31.5%で、衣服に対する積極性がみられる。

更衣動作は全身運動である。身体各部を動かし、脳を活性化させ、筋肉活動・精神活動を活発にする効果がある。

総務庁の示す高齢者に対する介護の内容<sup>5)</sup>による

3-4. 衣服の着替 (%)

項目	施設	全体	A	B	C
毎日着替えている		53.2	16.7	90.7	64.6
時々着替えている		27.1	41.7	7.4	27.5
全く着替えない		10.7	22.2	0	5.9
その他		9.0	19.4	1.9	2.0

と、着替え、入浴、排泄の手助けは、それぞれ30~40%を占め、着脱動作が自立して行えるかどうか介護の要・不要に大きくかかわっているとしている。

(5) 日常着（ふだん着）と寝衣（ねま着）に対する不満 ふだん着とねま着に対する不満について表3-5に示す。全体でふだん着は、「着脱のしやすさ（止め具の種類、大きさ、位置）」が21.1%で最も不満があり、ついで「動きやすさ」、「全体のデザイン・サイズ」が14.8%となっている。「上衣のたけ」や「袖（形、袖ぐり、たけ）」の不満は少ない。

ねま着は「吸湿性、通気性、保温性（むれる、寒い、暑い）」が31.4%で最も不満があり、ついで「着脱のしやすさ」22.5%となっている。不満の少ないものは、ふだん着と同じ傾向である。ふだん着は、衣服の機能、デザイン、ねま着は、衣服材料の性能、衣服の機能への不満がみられる。

施設別にみると、Aグループでは、ふだん着は「着脱し易さ」、ねま着は「吸湿性、通気性、保温性」がそれぞれ24.4%、37.2%と最も高い。Bグループでは、ふだん着の「デザイン・サイズ」が21.4%、ねま着の「吸湿性、通気性、保温性」が25.8%と最も高い。Cグループは、普段着の「着脱しやすさ」が24.8%、ねま着の「吸湿性、通気性、保温性」が28.5%と最も高い。どのグループも、ねま着については、被服材料のむれ、寒さ、暑さ等に対する不満が30~40%みられた。ふだん着については、A・Cグループが着脱のしやすさの不満を最も多くあげ、デザイン、止め

3-5. 日常着と寝衣に対する不満 (複数回答) (%)

項目	施設		A		B		C	
	ふだん着	ねま着	ふだん着	ねま着	ふだん着	ねま着	ふだん着	ねま着
全体のデザイン・サイズ	14.8	3.4	15.6	3.2	21.4	3.5	6.7	3.6
色・柄	9.7	1.7	7.8	0.8	12.9	2.4	9.0	2.4
衿(衿ぐり、形、大きさ)	2.6	1.7	2.3	0.8	4.3	2.4	1.1	2.4
袖(袖ぐり、形、たけ)	1.3	1.4	1.6	2.4	2.2	1.2	0	0
上衣のたけ	1.3	0.7	0	0	4.3	2.4	0	0
下衣のたけ	3.5	2.4	2.3	0.8	4.3	5.9	4.5	1.2
ゆるみ	11.9	13.7	15.6	11.3	8.6	17.6	10.1	13.1
動き易さ	14.8	4.1	14.8	3.2	12.9	5.9	16.9	3.6
着脱し易さ	21.1	22.5	24.4	29.0	12.9	15.3	24.8	20.2
皮膚刺激	5.5	14.3	3.1	8.9	3.2	12.9	11.2	23.8
吸湿性、通気性、保温性	9.0	31.4	8.6	37.2	6.5	25.8	12.4	28.5
特になし	3.9	2.4	3.9	1.6	5.4	4.7	2.2	1.2
その他	0.6	0.3	0	0.8	1.1	0	1.1	0

具の種類や大きさ、位置等も問題があると考えているようである。Bグループは、デザイン、サイズ、色・柄への不満が多くみられ、異なった傾向を示している。これは、入所者の自立の度合いの違いと考えられる。いずれのグループも、衿、袖ぐり、袖、上衣、下衣のたけに関する不満は少なかった。

#### 4. 介護者の意識

(1) 介護者の高齢者衣服に対する要求 高齢者の衣服に対する要求を23項目あげ、介護する側からみた重要度の評価を行った。

衣服の表現行動は、衣服の選択行動や快適性を追求した着装行動と深いかかわりを持っており、選択行動に影響する要因<sup>6)</sup>は、(1)心理的要因、(2)社会的・文化的要因、(3)経済的要因、(4)性能的要因に大別される。また、衣服着用時の快適性を追求する着装行動は、これらの要因に、人間、衣服、環境の要素がかかわってきている。

高齢者の衣服に必要とされる要求項目は、小林ら<sup>7)</sup>の重要項目をもとに23項目作成した。23項目の内17項目は活動、体型、生理機能、物理的・化学的特性、温熱性等の性能的要因である。さらに、3項目が経済的要因、2項目が色・柄・デザイン等の心理的要因、1項目が集団規範等の社会的・文化的要因である。また、着装の快適性の主要因から分類すると、性能的要因の内、人間にかかわる要因が9項目、衣服が5項目、環境が2項目、人間と衣服にかかわる要因が1項目あげられる。同様に、経済的要因の内、人間が2項目、衣服が1項目あげられている。社会的・文化的要因の内、人間と衣服にかかわる要因は1項目のみである。

この23項目をランダムに配置し、重要度の評価を5段階の評定尺度法を用いて行った。「非常に重要」を5点、「かなり重要」を4点、「やや重要」を3点、「どちらともいえない」を2点、「重要でない」を1点として、評価、数量化して評定平均値を出した。

さらに、記入者(介護者)の属する施設別、性別、年齢別の衣服に対する要求度の違いを検討した。施設

は、前述のA、B、Cの3グループに分け、各グループを男女別、年齢別(20~30歳代、40歳代以上)の4グループに分け、11グループ(g1~g11)の検討を行った。グループ内容と、調査人数を表4に示す。ただし、「Aグループ男性、40歳代以上」は該当者1名のため、データの信頼性に問題があると判断して除いた。

また、23項目の項目内容と評定平均値を、全体と11グループ別に表5に示す。

全体の平均値でみると、多くの項目を「かなり重要」と考えており、「サイズが適当」、「保温性、吸湿性、通気性がよい」、「適度なゆとりがあり、締めつけたり圧迫しない」、「ひふを刺激しない」、「着脱がしやすい」の5項目を最も重視している。選択の要因は、全て人間、衣服、環境にかかわる性能的要因である。重要性の最も低いものは、「汚れが目立たない」の衣服にかかわる性能的要因があげられている。

表5のデータを大きさ23(項目数)の11変量(解析対象グループ数)データとみなして因子分析を適用した結果、抽出された因子は三因子で、それらの因子の累積寄与率は81.1%であった。表6に3つの因子のバリマックス回転後の因子負荷量と寄与率を示し、図2、図3に因子負荷量散布図を示した。

表6、図2、図3から第一因子には、g9、g1、g3が高い因子負荷量を示しており、「施設別の介護者の衣服に対する要求度を代表する因子」と解釈さ

表4. Group内容と調査人数

Group	内 容	調査人数
g 1	特養 (A), 男 (20-30歳代)	7(人)
g 2	特養 (A), 女 (20-30歳代)	19
g 3	特養 (A), 女 (40歳代以上)	46
g 4	軽費他 (B), 男 (20-30歳代)	5
g 5	軽費他 (B), 男 (40歳代以上)	2
g 6	軽費他 (B), 女 (20-30歳代)	11
g 7	軽費他 (B), 女 (40歳代以上)	37
g 8	老健 (C), 男 (20-30歳代)	3
g 9	老健 (C), 男 (40歳代以上)	5
g 10	老健 (C), 女 (20-30歳代)	15
g 11	老健 (C), 女 (40歳代以上)	28

れ、その寄与率は48.6%であった。第二因子は寄与率 量を示しており、「女性介護者の衣服に対する要求度 23.6%あり、g 6, g 11, g 2, g 10が高い因子負荷 を代表する因子」と解釈された。第三因子にはg 5,

表5. グループ別評定平均値

項目	Group	全体	g 1	g 2	g 3	g 4	g 5	g 6	g 7	g 8	g 9	g 10	g 11
1 サイズが適当		4.7	4.4	4.8	4.7	4.3	4.0	4.7	4.8	5.0	4.4	4.3	4.6
2 色・柄、デザインにおしゃれ感		3.7	4.1	3.8	3.6	3.8	4.5	3.4	3.9	4.3	3.4	3.3	3.4
3 所持衣服の数が適当		3.7	3.9	3.7	3.7	2.8	3.5	3.4	3.6	3.3	2.4	3.9	3.9
4 車椅子の使用者が着易いデザイン		3.9	3.6	4.2	4.0	4.8	4.5	3.9	4.0	3.3	3.4	3.5	3.8
5 外観が健常者の衣服と変わらない		3.9	4.1	4.3	3.9	4.0	4.0	3.3	3.8	3.7	4.0	4.0	3.9
6 着ていて気持ちが明るく楽くなる		4.1	4.1	4.2	4.3	4.8	5.0	4.0	4.1	4.3	3.8	3.8	4.0
7 汚れが目立たない		2.7	2.7	2.5	3.0	1.8	3.0	3.1	2.7	1.7	2.6	2.4	2.5
8 気温の変化に簡単に調節出来る		4.2	3.9	4.1	4.3	4.5	4.0	4.1	4.2	3.7	3.4	4.3	4.4
9 保温性、通気性、吸湿性がよい		4.7	4.6	4.8	4.8	5.0	4.0	4.9	4.8	4.7	4.2	4.6	4.9
10 伸縮性があり軽い		4.6	4.6	4.5	4.7	4.8	4.5	4.6	4.3	4.7	4.4	4.5	4.8
11 丈夫で長く使用出来る		3.7	4.1	3.8	3.7	4.0	4.5	3.9	3.6	4.3	3.2	4.1	3.4
12 ゆとりがあり、締めつけ圧迫がない		4.7	4.7	4.7	4.8	4.8	4.5	4.8	4.6	4.7	4.2	4.5	4.7
13 皮膚を刺激しない		4.7	4.9	4.7	4.8	4.8	4.5	4.1	4.7	3.7	4.4	4.7	4.8
14 臭いがつきにくい		3.4	4.1	3.2	3.6	2.8	5.0	2.5	3.6	2.7	3.6	3.2	2.9
15 洗たくがし易く、取り扱いが便利		4.5	4.1	4.5	4.7	4.0	5.0	4.6	4.5	4.3	3.8	4.5	4.5
16 着脱がし易い		4.7	4.7	4.8	4.8	5.0	5.0	4.8	4.7	3.7	4.0	4.5	4.9
17 止め具の種類、大きさが適当		4.3	4.1	4.2	4.3	4.3	4.5	4.3	4.4	3.7	4.0	4.5	4.3
18 日常の動作に便利		4.6	4.7	4.5	4.7	5.0	3.5	4.6	4.5	3.7	4.2	4.5	4.6
19 排泄の動作に便利		4.6	4.9	4.6	4.8	5.0	3.5	4.1	4.6	3.3	4.4	4.6	4.8
20 着脱の機能訓練、自立を助ける		4.3	4.6	4.1	4.6	4.8	3.5	3.5	4.2	3.7	3.8	4.5	4.6
21 安全が配慮してある		4.5	4.7	4.6	4.5	5.0	3.5	4.0	4.6	3.7	4.0	4.6	4.7
22 買い替えがし易く適当な価格		4.1	4.0	3.8	4.1	4.5	4.5	4.0	4.4	4.0	3.8	4.5	3.8
23 介助し易い		4.4	4.3	4.5	4.6	5.0	3.5	3.4	4.4	3.3	4.4	4.3	4.2

表6. バリマックス回転後の因子負荷量

Group	第一因子	第二因子	第三因子
g 9	0.8615	0.1588	0.2050
g 1	0.8524	0.2570	0.1204
g 3	0.8229	0.5214	0.0727
g 6	0.3835	0.7580	0.2889
g 11	0.7398	0.6608	-0.0451
g 2	0.7649	0.5379	0.2175
g 10	0.7445	0.5324	0.0468
g 5	0.0324	0.0423	0.6270
g 8	0.3664	0.4925	0.5708
g 7	0.7956	0.4902	0.2231
g 4	0.7698	0.3980	0.1647
寄与率	0.4855	0.2355	0.0902
累積寄与率	0.4855	0.7210	0.8112

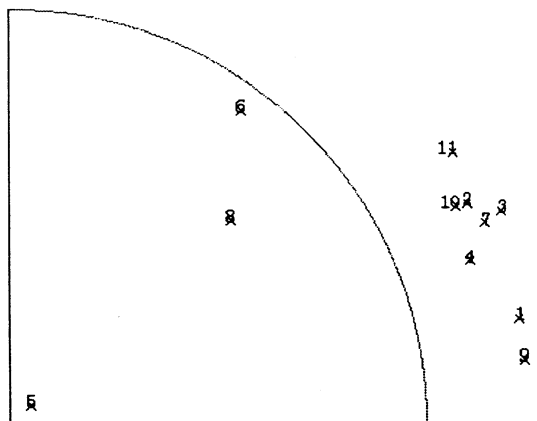


図2. 因子負荷量 散布図  
(横軸：第一因子、縦軸：第二因子)



g 8が高い因子負荷量を示しており、「男性介護者の衣服に対する要求度を代表する因子」と解釈され、その寄与率は9.0%であった。

表7に各項目の因子得点スコアを示す。それに基づいた各項目の因子得点の散布図を図4、図5に示す。

図4から、介護必要度の高い施設で、女性介護者が重視しているものは「着脱がし易い(項目16)」、「適度なゆとりがあり、圧迫しない(12)」、「サイズが適当(1)」の人体にかかわる性能的要因、「保温性、通気性、吸収性がよい(9)」、「伸縮性があり、軽い(10)」の環境や衣服にかかわる性能的要因などがあげられる。

「色・柄・デザインにおしゃれ感がある(2)」, 「着ていて気持ちが明るく楽しくなるような色・柄・デザイン(6)」の衣服にかかわる心理的な要因は、介護必要度がやや低い施設で、女性介護者の要求度のやや低いとこ

表7. 因子得点 (回帰推定)

項目	第一因子	第二因子	第三因子
1	0.27578	0.74524	1.47613
2	-0.86490	-0.86569	1.50870
3	-1.83839	1.23129	-1.94824
4	-0.82990	0.08988	0.58249
5	0.07189	-0.86722	-0.20245
6	-0.26624	-0.09459	1.25691
7	-2.72837	-0.86445	-1.81506
8	-0.70897	1.21226	-0.89140
9	0.30225	1.33940	0.57575
10	0.26852	0.99408	0.07429
11	-1.25972	-0.23839	1.59699
12	0.35826	0.85223	0.98333
13	1.45946	-0.30260	-0.44050
14	0.21121	-3.23730	0.28842
15	-0.40298	1.27066	0.86669
16	0.41381	1.15231	0.10267
17	-0.13015	0.40408	0.19421
18	0.79203	0.12064	-0.41779
19	1.62886	-0.49654	-1.42208
20	0.86941	-0.20400	-2.06201
21	0.87861	0.09839	-0.97346
22	-0.17483	-0.54806	1.20754
23	1.67434	-1.79159	-0.54114

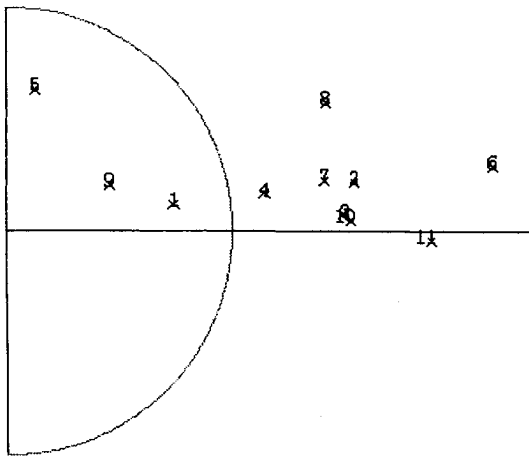


図3. 因子負荷量 散布図  
(横軸：第二因子、縦軸：第三因子)

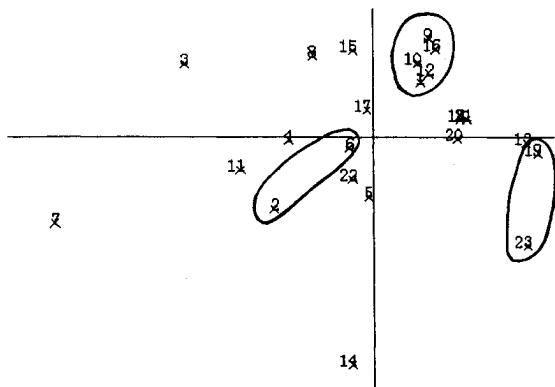


図4. 因子得点 散布図  
(横軸：第一因子、縦軸：第二因子)

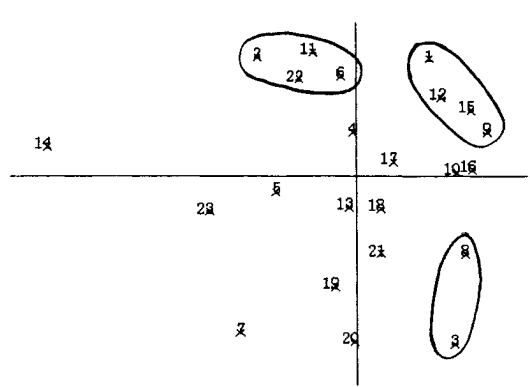


図5. 因子得点 散布図  
(横軸：第二因子、縦軸：第三因子)

ろにみられる。「排泄の動作に便利である(19)」、「介助しやすい(23)」の人体にかかわる性能的要因は、介護必要度の高い施設で女性介護者の要求度の低いところにみられる。女性介護者の衣服への要求は、介護必要度の違いにより、性能面と心理的・経済的面の2つのグループが存在すると考えられる。

図5から男性、女性共に要求度が高いものは、「サイズが適当(1)」、「適度なゆとりがあり、締めつけたり圧迫しない(12)」の人体にかかわる性能的要因、「洗たくがし易く、取り扱いが便利(15)」、「保温性、吸湿性、通気性がよいもの(9)」の衣服や環境にかかわる性能的要因があげられる。要求度が女性に高く男性に低いものは、「気温の変化に簡単に調節できる(8)」、「所持衣服の数が適当(3)」の環境に関する性能的要因、経済的要因があげられる。要求度が男性に高く、女性にやや低いものは、「丈夫で長く使用できる(11)」、「買い替えがし易い、適当な価格である(22)」の経済的要因や、「着ていて気持ちが明るく楽しくなるような色・柄・デザイン(6)」、「色・柄・デザインにおしゃれ感がある(2)」の心理的要因があげられる。女性介護者は、サイズ、ゆとり、洗たく、材料等の性能面を重視し、男性介護者は色・柄、デザイン、価格等の心理、経済面を重視しており、性別による要求項目の違いが明らかになった。

(2) 日常着(ふだん着)と寝衣(ねま着)のデザインの要望 介護する側からみて、介護しやすく、着脱させやすく、高齢者にとって気持ちよく、楽に着られて動きやすく、デザインがよいと思われるものを、ふだん着とねま着に分け、それぞれの衿、上衣の明き、

表8. 日常着と寝衣のデザインの要望

種類	ふだん着	ねま着
オープンカラー	43.5	36.7
シャツカラー	42.4	4.2
スタンドカラー	0.6	0
ボーカラー	1.2	0
Vネックライン	2.9	48.3
ラウンドネックライン	9.4	10.8

袖の形、下衣(ズボン)、止め具について検討した。止め具以外は、調査票にそれらのデザインを図示した。その結果を表8に示す。

(1) 衿

6種類の衿・衿ぐりの中で、ふだん着は「オープンカラー」の出現率が43.5%と最も高く、ついで「シャツカラー」が42.4%となっている。この衿は、頸窩部分にゆとりがあり、前傾になる高齢者の頸付根や、頸の形をカバーし、着脱しやすく、着心地のよいものである。「スタンドカラー」、「ボーカラー」はほとんど選ばれていない。ねま着は「Vネックライン」の出現率が48.3%と最も高く、次いで「オープンカラー」が36.7%となっている。ふだん着同様に「スタンドカラー」、「ボーカラー」は全くなかった。「Vネックライン」は、衿がなく、衿ぐりの前中心が下がっているため、就寝動作の支障にならず、着心地がよいと考えられる。(表8-1)

(2) 上衣の明き

4種類の上衣の明きの中で、ふだん着は「前明き」の出現率が52.9%と最も高く、次いでかぶり型の「短い明き」が36.5%となっている。前明きは着脱が楽に早く出来、身体機能障害にもある程度までは対応出来、着脱の自立にも対応できると考える。「きもの打ち合せ」は非常に低い。ねま着も「前明き」の出現率が55.3%と最も高く、ついで「きもの打ち合せ」が25.5%とふだん着と異なった傾向を示している。「きもの打ち合せ」は、日常行動では前明きのゆとりの多さが問題になるが、ゆとりの多さ、明きの広さがふだん着と同様の利点になると考えられる。かぶり型の「短い明き」は非常に低い。「明きなし」のかぶり型は、ふだん着、ねま着共に低い。上肢を上げてかぶる

種類	ふだん着	ねま着
前明き	52.9	55.3
短い明き	36.5	3.7
明きなし	10.0	15.5
きもの打ち合せ	0.6	25.5

動作が、介護者にも高齢者にも負担が大きいと考えられる。(表8-2)

### (3) 袖

4種類の中で、ふだん着は「ラグランスリーブ」の出現率が52.0%と最も高く、ついで「セットインスリーブ」が35.0%となっている。「ラグランスリーブ」は、袖ぐりにゆとりがあり、腕の動作適応が良く、着脱が容易で、袖山の高さも目的に応じて多様に変化させることが出来るため、美しいシルエットも出し易く、高齢者の衣服に多く用いられている。「セットインスリーブ」は、腕付根線に添って袖ぐりがあるため、着脱や、腕の動きに困難な点が生じ、拘束感があるが、衣服の袖としては、基本的で美しいものである。「きものスリーブ」は非常に低い。ねま着も、「ラグランスリーブ」の出現率が36.7%と最も高く、ついで「きものスリーブ」が27.8%となっており、ふだん着と異なる傾向を示している。「きものスリーブ」は、「ラグランスリーブ」と同様な機能を持っているが、ゆとりはさらに多く、きものの機能と同様、活動的ではないが、着装状態が快適である。「セットインスリーブ」は非常に低い。(表8-3)

### (4) 下衣(ズボン)

3種類のズボンの中で、ふだん着は「ウエストゴム入り(明きなし又は前明き)」の出現率が81.7%と最も高い。総ゴム入り、又は一部ゴム入りは着脱しやすく、ウエストにゆとりがあるので楽であり、立位から座位への動作にも無理が生じにくく、体型の変化にも対応出来、機能的である。美的シルエットの面では「ベルトつき」に劣るが、高齢者のふだん着の大半に用いられている。ねま着は「ウエストゴム入り」の出現率が61.4%と最も高く、ついで「ウエスト・すそゴム入り」が38.6%となっている。すそゴム入りは足の動きに危険性が少なく、保温効果があるが、ズボンの美的シルエットとしては問題点もあると考えられる。「ベルトつき」は、拘束感が強いいため、ふだん着、ねま着共に低かった。(表8-4)

### (5) 止め具

6種類の止め具の中で、ふだん着は「ボタン」の出

現率が66.1%と最も高く、次いで「スナップ」が11.9%となっている。衣服の着脱は、はおる、かぶる、はくなどの動作によって行われるが、明きの位置と大きさ、止め具の形式が着脱のし易さを左右し、高齢者の自立にも関連してくる。止め具として使用の多いボタンは、高齢者にとって大きさや位置、ボタンホールの方角に配慮が必要である。中橋ら<sup>8)</sup>によると、高齢者のボタンかけ・スナップかけの比較に置いて、男性はスナップ>ボタン直径1cm>ボタン直径2cm>ボタン直径3cmの順に時間がかかり、女性はボタン直径1cm>スナップ>ボタン直径3cm>ボタン直径2cmの順に時間がかかっている。ボタンホールの方角は、たて方向の方がかけ易い結果となっている。高齢者<sup>9)</sup>は上肢上挙、体幹の前屈・後屈などの関節の可動域の減少や、手指の器用さや手と目の供給の衰えがみられるため、これらを考慮した止め具がさらに必要と考える。ねま着は「マジックテープ」の出現率が38.4%と最も高く、ついで「ボタン」が23.3%となっている。「マジックテープ」は、介護者、高齢者共に着脱がし易いため、高齢者の多くの服種に用いられている。これは、強い力が加わるとはずれ易く、テープ面にごみや糸くずがつき易い、洗たくに要注意等の問題点もあげられているが、動きの少ないねま着には多く使用されているようである。「ホック」は、ふだん着、ねま着共に低かった。(表8-5)

8-3. 袖の形 (%)

種 類	ふだん着	ねま着
セットインスリーブ	35.0	8.3
ラグランスリーブ	52.0	36.7
ドルマンスリーブ	12.4	27.2
きものスリーブ	0.6	27.8

8-4. 下衣(ズボン) (%)

種 類	ふだん着	ねま着
ベルトつき(前明き)	2.9	0
ウエストゴム入り(明きなし,前明き)	81.7	61.4
ウエスト・裾ゴム入り	15.4	38.6

8-5. 止め具 (％)

種 類	ふだん着	ねま着
ボ タ ン	66.1	23.3
ス ナ ッ プ	11.9	15.7
ホック (かぎホック)	0.6	0
フ ァ ス ナ ー	8.3	10.7
マ ジ ッ ク テ ー プ	8.9	38.4
ひ も	0	7.5
そ の 他	4.2	4.4

表9. 望ましい色

(複数回答) (％)

種 類	男 性	女 性
赤 色 系 統	0.6	17.7
橙 色 系 統	3.5	19.8
黄 色 系 統	7.0	19.8
緑 色 系 統	20.4	7.1
青 色 系 統	37.6	8.0
紫 色 系 統	1.2	12.4
白 色 系 統	10.8	8.3
灰 色 系 統	14.3	2.7
黒 色 系 統	2.0	0.6
そ の 他	2.6	3.6

**衣服の色** 高齢者の衣服の色として適当と思われる色系統について、男女別の傾向をみた。色については、色相のみの色系統を6色、無彩色系統を3色の合計9色とした。明度、彩度は示さず、色表も呈示しないため、記入者の色に対するイメージが大きいと考えられる。その結果を表9に示す。

男性に適当な色は、青色系統が37.6%と最も高く、次いで緑色系統が20.4%、灰色系統が14.3%となり、赤色系統は最も低い。寒色、中性色、無彩色系統が高く、沈静色傾向であり、従来の男性の色のイメージが強い。女性に適当な色は、橙色系統、黄色系統がいずれも19.8%と最も多く、次いで赤色系統が17.7%となっており、黒色系統は最も低い。暖色系統のみが高く、興奮色傾向で、女性の色のイメージが強い。

日本の高齢者の服装は、地味で、控えめで、くすんだ暗いイメージがある。高岡ら<sup>10)</sup>によると、高齢者の衣服の色選びには、「年齢にふさわしい」、「上品に見

える」、「気分が落ち着く」等があげられ、他人の目や、社会的規範が影響し、同居家族の有無、化粧等のおしゃれ心があるか否かも無関係ではないとしている。嗜好色は、加齢に伴って低明度、低彩度に移行するが、高齢期の肌の色をカバーし、気持を明るく活性化させるために、従来の「男性らしい」、「女性らしい」色にとらわれず、好みの色系統の中で、高明度、高彩度の明るいきれいな色の使用が望ましいと思われる。

**施設内での生活上の問題点** 高齢者が施設で生活するに当たり、問題の多い事項について、食生活分野、衣生活分野、住生活分野、生活経営（生活行動）分野に関して検討した。問題が多い事項は全体で「生活経営分野（生活のしかた、生活行動）」が49.7%と最も多く、ついで「食物分野」で、32.1%となっている。

衣生活分野は1.8%と非常に少ないが、衣服の着脱行動等は、生活行動の中にも入るため、生活経営分野には、衣・食・住の一部が入っていると考えられる。衣服の問題点は、他分野と比べ、相対的には少ないと考えられているようである。

5. 高齢者の衣服についての要望

回答のあった180施設中78施設から要望があった。特別養護老人ホームと老人保健施設からの要望が多く、記入者は90%以上が女性職員で、40歳代、50歳代の方がそれぞれ30%近くを占めた。

自由記述で、記述内容は多岐にわたっているが、特に多くみられたものを次にあげる。( )内は施設数である。

- (1) 自力で着脱しやすいもの (22)
- (2) 通気性、吸湿性、伸縮性のよいもの (15)
- (3) 明るいきれいな色の衣服 (12)
- (4) 身体をしめつけず、ゆったりしたもの (11)
- (5) 洗たくし易く、洗たくに耐えるもの (10)
- (6) おしゃれでデザインのよいもの (9)
- (7) ボタンの大きいもの (7)

以上のことから次のような要望傾向がみられる。

- (1) 自力で着脱できるデザイン、止め具の要望が強

く、自立につながる衣服の必要性が訴えられている。

- (2) 布の材質やゆとりで、肌触り、衣服内気候、衣服圧を快適に保ち、管理のし易さの必要性をあげている。
- (3) 明るいきれいな色、おしゃれなデザインなど心理的快適さの要望が多い。

## 要約

高齢者入所施設の介護者を対象に、高齢者の衣服による自立や衣生活の快適性を検討した結果、次のような傾向を得た。

- (1) 介護に当たる責任ある立場の人は、女性が9割近くで、40歳代の人が介護の中心となっており、入所者対象の諸行事の実施率は高いものが多い。

衣服にかかわるファッションショー、化粧品は実施率は低い、情動活性化意識の高まりと共に、実施は増加傾向にあり、その効果は期待できると考えられる。

- (2) 衣服への関心は、自立度により差異はあるが全体的には低い。高齢期の精神的充足感形成には、家族の対応のあり方が重要な役割をもっており、家族の快適な衣服の提供は情緒的支援につながると考えられる。着替は毎日行っているところが多く、着脱は高齢者の自立に大きく影響しているため、衣服に求める第一要件は、着脱のし易さといえる。日常着、寝衣に対する不満は、着脱し易さ、繊維の性能の面に多くみられるが、高齢者の自立の度合いによって異なっている。
- (3) 介護者の高齢者衣服に対する要求は、「サイズ」、「ゆとり」、「着脱」、「ひふ刺激」、「保温・吸湿性」等の性能的要因が高く、要求項目について、介護者の施設別、性別、年齢別の因子分析を行った結果、三つの因子が抽出された。施設の種類、介護者の性別により、衣服に対する要求度に違いがみられることが明らかとなり、性能的要求と、心理的・経済的要求に分類された。デザイ

ン、色・柄、おしゃれ感等の心理的要求は、衣服による高齢者の活性化に必要な要素であるが、施設別、介護者の性別により偏りがみられた。心理的側面からの衣服の快適性については、施設、介護者、家族、生産者が幅広く対処する課題であると考えられる。

- (4) 介護しやすく、高齢者にとって快適なデザインを、衿、上衣の明き、袖、下衣（ズボン）、止め具について検討した。日常着、寝衣共に要望の多いオープンカラー、前明き、ラグランスリーブ、ウエストゴム入りズボン等のデザイン面、機能面での更なる検討が必要と思われる。止め具は、着脱、自立に大きくかかわるが、ボタンの大きさ、位置、マジックテープの性能について、現状では高齢者の使用に不適合な点が多く、問題点が多いと考えられる。

適当と思われる衣服の色については、男性には沈静色嗜好傾向、女性には興奮色嗜好傾向であったが、明度、彩度が高く、明るいきれいな色を用いることが、情動を活性化し、生活の自立につながると考えられ、色・柄の豊富な衣服を提供し、選択の幅を広げることが必要と考えられる。

## 引用文献

- 1) 田中優, 秋山学, 泉加代子, 上野裕子, 西山正之, 吉川聡一 (1998) 高齢者の自立と着行動に関する研究, 繊維製品消費科学39(11), 721
- 2) 小林茂雄, 杉山真理 (1997) 『日本人の生活』日本家政学会, 東京, 170
- 3) 余語真夫 (1996) 『まとうー被服行動の心理学ー』朝倉書店, 東京, 127
- 4) 伊波和恵, 浜治世, 西田真弓 (1998) 高齢女性における化粧を用いた情動活性化の試み, 文京女子大学紀要 2, 82
- 5) 岡田宣子 (1999) 『変動する家族』日本家政学会, 東京, 229
- 6) 小林茂雄 (1989) 『表現としての被服』朝倉書店, 東京, 163
- 7) 小林茂雄, 杉山真理 (1997) 『日本人の生活』日本家政学会, 東京, 171
- 8) 中橋美智子, 森悦子 (1994) 『日本人の生活』日本家政学会, 東京, 165

- 9) 猪又美栄子 (1996) 『着装の科学』光生館, 東京, 85
- 10) 高岡真佐子, 岡田宣子, 酒井豊子 (1997) 高齢者の被服の色の嗜好に関する一考察, 日本家政学会第49回大会要旨集, 208